

中国の旅 食べものの恨ミシュラン

SARSの心配も何のその。今夏も、法学部・田中ゼミの中国旅行は大盛況のうち終わった。首都北京に始まり、周辺自治区は内モンゴル、新疆、チベット……そして上海の夜景でしめくるという25日間の豪華ツアー。でも、あくまで「研修」旅行。コレお忘れなく(笑)、「中国の全体像を知る」ことを目標にしています。ただ、人間ツマラナイことをよく覚えている。わたしの場合思いだすのが、いくつかの食事の場面である。

学生記者 江部理恵(法3年=田中ゼミ)

やっぱりキョーレツ!?本場のお味

記念すべき初日のディナーは、北京在住のガイド推薦で、庶民的な麺屋に決まった。テーブルが汚れていたり、箸を投げられたりと少々ビビるが、出てきた牛肉麺は見た目日本の肉うどん。が、一口食べた瞬間、みな撃沈。テキは緑色の香草、パクチーだった。独特の強い香りが、どんぶり中に広がっている。さあ、急いでビールを流し込め! うつ、ぬるい……。

中国には、ビールを冷やしておく習慣がないそうだ。しかも名物の燕京ビールには、日本人好みのキレ・のどごしの良さはまったくない。初日にして重すぎる雰囲気。しかし、ビールは親切にもガイドからのおごりである。みな必死にパクチーを箸で退け、麺をすすり、ビールも余さず飲みほしたのだった。

カルチャー・ショック。食事はまさにその第一歩である。

お米の一粒一粒までが…

4日目は、日本の某商社の北京支店を訪れ、中国でのビジネスのお勉強。みな学習意欲に燃えて大満足でしたよ。高級オフィスはきれいだし、おエライさんがていねいに説明してくれるし、なにより弁当が……つまりこれが最大の理由なのでした(笑)。

食事は連日ドギモを抜かれるような中華のオンパレード。この日出た日本料理店のお弁当はといえば、白いご飯に梅干、たくあん、たまご焼き、からあげ、焼鮭、エビフライ……。ああ、米のひと粒ひと粒までが輝いて見える。なつかしい木の割り箸を握りしめ(中国の箸は大きくて角ばっている)、一心不乱に食べた。「三得利(サントリー)」の烏龍茶も日本のと変わらぬ味がする。やっぱり和食ですよ。しみじみとかみしめながら横を見ると、先ほど話していた部長さんはずっとに食べ終えている。なんとという速さ。日本の高度成長期

のような熱気の中国、そこで生きる日本人ビジネスマンの範を見た、といつては部長さん「そんなオーバーな」とおっしゃるかもしれないが。

旅人の心得

お酒は楽しい。たとえ飲みすぎて後悔しても、そこから良い笑い話なんか生まれるもの。しかし6日目、内モンゴルでの事態はあまり笑えたハナシではなかった。

見渡す限りの大草原。昼間、ラク

ダの馬車やウマに乗って、モンゴル相撲を見て遊びほうけ、夜は宿舎のパオ（観光用ですが）に隣接した食堂で大宴会。

「ガーン！」

円卓のふちに茶碗をぶつけて乾杯！ 中身はアルコール度数50〜60度の白酒（バイチュウ）。強くてノドが痛いから、いきおい一気飲みするしかない。

「かあ〜つ、うまい！」

が、ビールをゴクゴクやった後の



おじいさんが、まるごと羊肉をぶらさげて売っていた=カシュガルの職人街

「かあ〜つ」とはわけが違う。本当に頭がくらくらしているのだ。そしてけつして美味くはない。でも臭いマトンの炒め物や味のない包子（パオズ）にくらべれば、ついつい杯は進んで……。

と、決まって始まるカラオケ大会。一曲終わるたびに、

「好、好（ハオ、ハオ）！」

さらにはとなりに居合わせたイギリス人からみ始め、千鳥足でビデオ撮影。外に出てからもその勢いはますますエスカレート。草原で絶叫するわ、水たまりに落ちるわ、窓ガラスは割るわ……。でも、これはまだマシな方。満天の星空と、地平線からの日の出を見逃したわたしに比べれば。まったく、箱根へ行つて温泉に入れなかったようなものです。昨夜食堂を出たとたん、動けなくなつた。朝、目を覚ました瞬間襲ってきたコーカイは、今も笑い話にはなりえない。

そんなわけで、旅先でのお酒はほど



チベットのトゥクパ。ティー付きで37円

ほどに！ とくに、夜がメインの場合には。

標高3600メートルの味

11日目。パミール高原をさらに西へ進む。バスに揺られること8時間。美しい山々に囲まれた湿原の中にタシュクルガンはあった。中国最西端の町は、キルギスやタジキスタン、アフガニスタンと隣接し、イスラム系のタジク族が住んでいる。もはや「中国」がかすれゆくようなこの町で、皮肉にも最高においしい中華料



じゅうたんは全て女性の手作業で=カシュガル

「うまい！」

わたしは叫んだ。

見た目はいたってシンプル。でも卵とご飯がしっとりなじみ、ほどよい塩味、加えて油の香ばしさが口いっぱい広がる。標高3600メートルでしんなりした体は再びイキイキ動き始めた。小皿に何回もおかわりし、男も女もまさにガツガツ

食った。これまでがずっとマズい中華だったというわけではないけれど、味の基準はいつも「食えるか、食えないか」だった。素直においしいと思える感覚さえ忘れていたのである。旅も半ばで疲れがピークなことも重なって、体中に美味しみわたる心地する。

ガイドに案内されて入ったのは、こじんまりした庶民的な食堂だった。ひさびさに円卓でないのは新鮮だったが、壁にはサンドイッチやハンバーガーの、どこかいポスターがある。どこで手に入れたのやら、ここは中華料理屋なんでしょう、一応は？

しかし最初に出てきたチャーハンを口に入れた瞬間、

青菜やナスの炒めものも申し分なく

おいしく、みなお腹いっぱい。大満足で店を出た。みな興奮気味でふざけあつたり大笑いしたりしてホテルへと歩いていった。

富士山頂ほどの高さにあるせいか、見上げる星空はびつくりするくらいきれいだった。

チベットの水

海外では生水に注意する。でもチベットでは、売っているミネラルウォーターにも気をつけよう、と旅慣れた人に聞いていた。

16日目。チベットの中心街、ラサはたいへんな観光地。日本人はもちろん、欧米人、韓国人も多い。観光客向けのお土産商売の盛んなこと。日差しが強いため、露天の売店には、いろんなジュースがずらり。ここにはミネラルウォーターもある。が、

買ってはイケナイ！ それを飲んだ2人の男の子は、その晩、高熱をだして倒れてしまった。

消費期限は2002年4月……

エ？ 一年以上も前じゃないの！

確認しなかったのも悪いけど、なんとこの商売魂！ 翌日、文句を言いにその店へ行つてはみるが……ナイ！ 逃げたのか、ただ気まぐれで場所を変えたのか。もちろん、飲んだ者の負けである。呆然。

辺りには、今日も土産屋が軒を連ねていた。わたしのようなか毛が行けば、しつこく付きまとわれ、うまく断れないと高い値段で買わされてしまう。しかも、中国のほかの地域に比べチベットは、その執拗さがハンプアではない。あるときは、バスの窓をたたかれ、ジャラジャラした首飾りを突きつけられた。物乞いも多い。チベット仏教の僧侶までが追いかけてくる。

貧しい。それをいやというほど感じる。

5日後わたしたちは、南京のヒルトンホテルにいた。今回の旅行でランチはもつとも上。朝食もそりゃも



チベットのポタラ宮・屋上にて（中列右から3番目が記者）

うゴージャスなバイキングなんです。大興奮。わたしたちは猪突猛進、ありとあらゆる料理をテーブルいっぱい運びまくった。そして大量に食べ残した。いつものように。今になって、思う。チベットの人をふと「卑しい」と思った自分が恥

ずかしい。「喜捨は富める者の罪滅ぼし、物乞いこそ聖なる心」という教えもあるらしい。日本のぜいたくでポップな感覚だけでは世界を一步も歩けない。

宝物のカップ麺の味が…!?

上海で迎えた23日

目。旅も残すところあと2日となった。ヨシ、といってわたしが取り出したものは……「日清カップヌードル」！日本から非常食に持ってきていたが、もったいなくてずっと食べることができなかつた。

ていた。弱った体にしみ込んだおいしさが忘れられない。一方、北京で買ったカップ焼きそばを食べた、となりの男の子は

「すっぺえ！」

馴染みのない酸っぱい焼きそばは、2口ほどでギブアップ、だった。

それ以来、日本のカップ麺は大事に大事にとってきた。しかし、である。……おいしく感じないのだ。マズくはないけど、別に感動するわけでもない。へえ〜こんなもんか、という感じ。部屋で一人テレビを見ながら、なんだかさびしいような変な気持ちで黙々と食べた。きつと、舌がこちらの食べ物に慣れてしまったせいだろう。これまでの食事、びつくりすることはあつても、なんとか口に運んできた。パクチーのごとき魔物だって食べられないものじゃない。食事においては「慣れ」がものをいうのではないか。慣れている味を、おいしいと感じるの



あちこちの大学にも「SARS 予防」の看板があった

かもしれない。

「奇食に見えて、しかし、奇食など世界には一つとしてない」

逸見庸著『もの食う人々』の、バィタルな言葉がよみがえってきた。

恨ミシラン。でも、数々の中華料理に対して、ではない。飽食にどっぷり浸かっていた舌はちよつと情けなかつたな、と少し恨んでいる。とりあえず、嫌いなトマトでも克服してみようかな。